

シンポジウム 1：学生時代から行う国際交流の意義

1. 司会のことば

近藤 弘*

グローバル化が進展している現在、国々は互いに依存しあいそれぞれを無視できなくなりつつある。そこで本シンポジウムでは、異なる歴史や文化のなかで育った人々と共存していくことを学ぶために、どのように国際交流を進めているか、またその意義は何かについて、国際的な活動・教育を実践されてきた先生方のご経験を発表いただき議論を深めた。

台湾姉妹校との交流・海外研修旅行を実践してこられた昭和医療技術専門学校の山藤 賢先生は、2年次に台湾への研修旅行を実施し、現地で交流会、講演会、現地の歴史・文化に触れる機会を設け、学生が姉妹校生と共同作業し、現地の方から国の成り立ちや人々の思いを聞き、直に異文化に触れることで多くのことを体感していることを紹介した。実体験を通して得られる知恵は生きていくための大きな力となることから、研修旅行の意義は極めて大きいこと、また自己を確立し、自身の文化を発信できるようにすることが極めて重要であることを示した。

外部のプログラムに学生が参加することで国際交流を推進してこられた山陽女子短期大学の小野寺 利恵先生は、和歌山県臨床検査技師会 HIV/AIDS 対策海外人材育成研修、大韓臨床病理士協会学術大会、語学研修ホームステイへの参加例を紹介した。現状では、独自で国際交流プログラムを設けることは難しいため、本臨床検査学教育学会が海外研修プログラムを立ち上げて加盟校学生が安心

して参加できるようにする、既存の日本臨床衛生検査技師会(日臨技)海外人材育成研修プログラムを今後も各地で積極的に開催する、またインターネットでのバーチャル留学を推進することも検討すべきであると提案した。

大学の国際交流センター事業であるネパールとの交換研修生派遣、大学コンソーシアムひょうご神戸(ネパールコース)に関わってこられた神戸常盤大学の柳田潤一郎先生は、交換研修先医療系大学との交流、ネパールコースでの実践例、および現場を体験した学生の様子、感想を紹介した。交換研修先とは学生・卒業生が相互に訪問し、医療・教育施設への訪問、交流が行われ、ネパールコースは協定大学との単位互換制度に基づくプログラムであり、医療・保健関連施設での見学・フィールドワークが行われていることを報告した。

学生を対象とした国際交流事業を開始して3年目を迎えられた香川県立保健医療大学の眞鍋紀子先生は、交流協定を締結している4大学の概要と学生が参加したカナダのロッキーズ大学、南アルバータ工科大学(SAIT)との交流の経験と留学に対する学生の意識について紹介した。特にSAITからの留学生を受け入れた学生はSAIT学生の優れた検査手技能力、実習内容把握力を感じたこと、交流できたことが楽しかったことなどとともに、学生の留学に対する積極性が低いことを報告した。

各教育施設の取り組みは多様であり、今後の国際的な取り組みへの参考となる貴重な機会となった。

*関西医療大学保健医療学部臨床検査学科 hiro47kondo@gmail.com